

歌川広重画「参宮上京道中一覽双六」

写縦横とも約 72 センチの大きな画面に、鮮やかな多色刷りで街道と宿場が描かれているこの作品は、江戸時代に活躍した浮世絵師・歌川広重の作になる道中双六です。

道中双六は、いわゆる「すごろく」の中でも特に江戸中期以降に発達したもので、人々が旅をする街道（＝道中）を題材にしています。一般によく目にするのは江戸日本橋を振り出しに、京都までの東海道の各宿場を一コマとして四角くマス目を切った双六ですが、ここに掲げたものは宿場だけではなく、その間の道筋もななめ上から見下ろすような目線で描かれていて、沿道の地形や坂の緩急などが誇張されつつ巧みに表現されています。道筋には蟻のように小さく旅人も描かれており、絵師の控えめなユーモアを感じることができます。

また、四日市宿から伊勢神宮への参詣の道筋も描かれていますが、これは江戸時代の人々にとって、旅といえば「伊勢参り」が最もポピュラーだったことを物語るものです。人の移動がきびしく規制されていた江戸時代にあって、伊勢神宮は誰もが大手を振って出かけることのできる、ほとんど唯一の旅の目的地でした。江戸中期以降、平和な社会を背景に庶民の間に旅の一大ブームが巻き起こりましたが、多くの人々は「伊勢参り」を表看板に街道を西へ東へと旅立っていったのです。

